

学びの架け橋

第6号

R8.1.8発行

発行者

岡谷市教育委員会

今回の話題 小-小連携で目指す教育的効果

市内小中学校の学校群化(グループ化)を推進する上で、同じ中学校に進学する小学生同士が、在学中から交流を深めていくことは大切な取組の一つです。

普段はそれぞれの学校・学級で学んでいる子どもたちが、教室や学校の枠を越えて他校の児童と関わることには、どのような意義があるのでしょうか。ここでは、小-小連携の目的と教育的効果についてお伝えします。

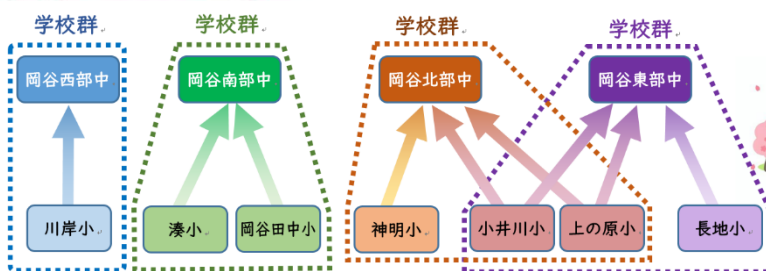
「おかやのまちじゅう学園化構想」

(1)市内小中学校の学校群化

- (2)訪問型交流とネットワーク型交流のスタイル構築
- (3)おかや絹結プログラムの充実と実践
- (4)新岡谷版コミュニティ・スクールへの移行
- (5)市内全域への小中一貫教育の基盤づくり

中1ギャップの克服に向けて

川岸小学校を除く市内6小学校では、中学校進学の際に、他校の小学生と新たに一緒に学級で生活することになります。友だち関係が大きく変わることは、新しい学校生活への期待を高める一方で、戸惑いや不安の要因にもなり得ます。



小学校から中学校への進学時に、生活環境や学習内容、人間関係の変化が重なることで、子どもに強いストレスが生じ、不適応を起こす現象は「中1ギャップ」と呼ばれています。この課題に対応するため、市内の小中学校では、円滑な接続を支える様々な取組を進めています。

その一つが小-小連携です。同じ中学校に進学する小学生同士が、卒業前から顔を合わせ、関係を築いておくことで、中学校入学後の人間関係の変化に対する不安を和らげることをねらいとしています。

毎年開催されている「いじめ根絶子ども会議」では、中学校区ごとに小学6年生と中学生が話し合いを重ねる中で、自然な交流が生まれています。

また、市内6年生が一堂に会する「岡谷市交歓音楽会」は、合唱や合奏を通して互いの学校を知り合い、仲間意識を育む貴重な機会となっています。

より豊かな学びを求めて

小-小連携の目的は、「中1ギャップ」への対応にとどまりません。

子どもたちは通常、所属する学級集団の中で学び、生活しています。これは、互いを深く理解し合い、安心して学校生活を送るための大切な基盤となります。一方で、人間関係や学びの枠組みが固定化され、考え方や体験の広がりが限定されてしまうという側面もあります。

そこで、学びの集団を意図的に再編成し、日常とは異なる友だちと協働する機会をつくる

ことで、子どもたちの視野を広げ、より豊かな学びにつなげようとするのが、小-小連携のもう一つの目的です。

例えば、湊小学校の2年生は児童数6名の小規模学級です。

新出漢字の「光」を学習した際には、

「ちょうど6画だから、ぼくたちでできるんじゃない？」

と声が上がり、教室の床に横になって体で文字を表現するなど、少人数ならではの工夫に富んだ学習が展開されていました。

その一方で、子どもたちからは「もっと大勢で鬼ごっこをしたい」という願いが、担任の先生からは「より多様な考えに触れながら学び深めてほしい」という願いが聞かれました。

そこで計画されたのが、同じ岡谷南部中学校に進学する岡谷田中小学校2年生との交流学习です。岡谷田中小学校2年生の児童数は2学級47名。規模の異なる集団同士の出会いは、双方にとって新たな刺激となりました。

これまでに2回の交流会を行い、湊小学校の子どもたちが願っていた大人数での鬼ごっこも実現しました。2回目の交流では、互いを名前呼び合う姿も見られ、確かな関係づくりが進んでいることがうかがえました。

今後は、こうしたつながりを基盤に、教科の学習でも一緒に学び合う交流授業を計画していく予定です。さらにその先には、ICTを活用し、離れた学校同士でも協働できるオンライン学習の可能性を探っていきたいと考えています。



子どもたちのつながりと学びを育むために

小-小連携は、単に学校同士が交流機会を設けるだけの取組ではありません。そこには、子どもたち一人一人が、これから先の学びや人とのつながりを前向きに捉え、自分らしく成長していくための大切な意味があります。

同じ中学校に進学する仲間と、早い段階から顔を合わせ、共に活動する経験は、「知らない相手」への不安を「知っている仲間」への安心へと変えていきます。これは中学校進学時の心理的な負担を軽減するだけでなく、新しい環境の中でも自ら人と関わろうとする力を育てることにつながります。

また、小-小連携は、子どもたちの学びそのものを豊かにする可能性を持っています。規模や特色の異なる学校の児童が出会うことで、考え方や感じ方の違いに気付き、自分とは異なる意見を尊重しながら学ぶ経験が生まれます。こうした経験は、多様性を認め合い、協働して課題に向かう力を育てる上で、これからの時代にますます重要となるものです。

今回の湊小学校と岡谷田中小学校の取組は、その一つの実践例です。小規模校ならではの良さ、比較的規模の大きな学校の良さが出会うことで、どちらの学校の子どもたちにとっても、新たな学びの可能性が広がりました。このような取組は、特定の学校だけのものではなく、市内の他の小学校においても、それぞれの実情に応じた形で展開していくことができると考えています。

今後は、同じ中学校区に属する学校同士が、交流の在り方や学習内容を工夫しながら、小-小連携を段階的・継続的に進めていくことが期待されます。さらに、ICTを活用することで、物理的な距離や時間の制約を超えた新しい学びの形も可能になります。対面での交流とオンラインでの協働を組み合わせることで、より多くの学校、より多くの子どもたちがつながる学びへと発展させていくことができるでしょう。